やまさき文化

'88-2＊No.7

山崎町文化連盟

〝やまさき文化〟七号発刊に際して

山崎文化連盟会長　壺阪　壽

〝やまさき文化〟も回を重ねること七回になりました。そしてその内容も大変充実したものになってまいりました。それは偏えに執筆してくださる皆様の本誌にお寄せ下さいますご好意と、編集委員の方々のご熱意の賜物だと思います。

地域文化を育ててゆくことは、前号の編集後記にも根岸編集長が書かれているように、「文化とは、小さな事蹟の積み重ねによって、築き上げられていくものである」のであって、一見小さなことのように見える事でも、その事蹟を大切に積み重ねてゆく努力をしているうちにその地域の文化が育ってくるものであります。そういった意味からも年に一回だけの発行でしかも小冊子ではありますが〝やまさき文化〟が少しでも山崎の文化活動の発展に寄与するよう念願する次第であります。特に昨年十一月には吾々の待望久しかった文化会館も立派に竣工をしたのですから、それを拠点にし一層山崎の文化活動が活発になりますことを期待する次第であります。

やまさき文化

★目　次★

〝やまさき文化〟七号発刊に際して　壺阪　壽　2
越後路雪話　林　沙鷗　3
ワラビとガンの話　北川　泰子　9
随想　鎮守の森にて想う　根岸　元彦　10
芸能祭に弾みを　長川　耕一　13
ともしびの賞の受賞を祝う　北川ちゑ子　14
青嶺句会四十周年の回顧と集い　和田　疎人　16
茶道に想う　前田　宗好　18
侏儒の愁い　杵屋佐与恵　18
観世流宗家をお迎えして　春名　義教　19
絵の心　藤原　義弘　19
植物同好会の活動　井口　武一　20
無形民俗文化財の指定をうけて　志水　正信　20
ヨーロッパの旅　平松　幹司　21
私の生きがい　谷口　二郎　21
プロの将棋　本條　衛　22
「一」　谷川　善勝　22
髙野圭介と囲碁の世界　下谷　厚　23
山崎郷土研究会研修部について　志水　美好　24
新潮三十五年　菅原　柾夫　24
尖粟の地で第九公演を終えて　尾崎　正明　25
編集後記　根岸　元彦　26

表紙画／比地の滝／藤原義弘
表紙題字／尾崎正一　カット／藤原義弘

越後路雪話

文学会　林　沙鷗

（一）

古来、豪雪に悩む越後路には、長い冬の陰湿な風土のため乳幼児期に目を患い失明するものが多かった。医療の未発達のためである。同時に越後路の人々はこの長い冬の無聊をかこって慰めを求めた。

ここに、瞽女（ごぜ）という門付けの女旅芸人の生まれる土壌があった。

瞽女には三百年の歴史があると言われている。彼女らは幼くして失明すると、親達は後ろ髪を引かれる思いでわが子を手離して瞽女にした。大方は親方と呼ばれる瞽女の師匠の口説きにもよるのだが、家族の生計も大きな要因の一つであった。

その修業は厳しく、旅廻りは十才を過ぎる頃から既に始まり、二十才の頃までは喉から血のでるような修練に明け暮れた。

旅廻りは約一ヶ月程続くため、三味線の外に生活用品を背負わねばならなかった。その重さは十キロ余りはあったという。四、五人が組をくんで、夜は瞽女宿と呼ばれる馴染みの農家に泊まる。一ヶ月程で一定の地域の旅を終えると、そこで一度区切りをつけて師匠の家に帰り、また改めて別の地域への旅に出る。この様な師匠の家が、越後路には最盛期には二十を超えたと言われる。

彼女らは、音曲の仏と称される如意輪観音への信仰のもとにその戒律は厳しく、旅中の行動はおきてによって細かく戒められ、殊に男女の交わりは固く禁じられていた。

しかし、そこは人間である。なかには、僅かではあるがその厳しい戒律に堪えきれず、転落していく、くずれ瞽女もあって、その末路は哀れであったと言う。

しかし、この瞽女という職業も、戦後の著しいマスコミの発達の前に急激に衰微して、昭和五十年を過ぎる頃には、その数はほんの五指に足らぬ程になり、年齢も七十近くの高齢になっていた。

北越には、養護盲老人ホーム「やすらぎの家」がある。

越後路最後の瞽女と言われた高見沢アキ、小森ミチ、桑原セキの三人が、いよいよ町の勧めで長い門付けの旅に終止符を打って、ホームに入所するという意志を内々に漏らした時、いち早くA新聞の地方支局の記者である松崎が、ホームの職員の一人である酒井皓次のところにそのニュースの真偽を確かめに来たことがある。

酒井と松崎は、この地方の郷土史研究グループの同人として、親しい間柄にあった。松崎は、いつも登山帽を無造作にかぶり、スポーティな服装で肩にカメラを下げて、精力的に飛び歩いていた。酒井は、そのニュースキャッチの早いのに驚かされた。

「どこで聞いたんだ」

「どこでもいいさ。地獄耳は、こちらの飯の種だからな」

関東育ちの歯切れのよい返事が返ってきた。

それから数ヶ月後、高見沢アキら三人の瞽女の入所の日が決まり、いよいよその当日が来た。この日をもって、越後路から三百年の歴史をもつ瞽女の姿が消えるのである。ホームの表門の付近には、この地方の新聞記者達が彼女らの入所する光景をとらえようとして待ち構えていた。

やがて彼女らの姿が現れると、記者達は、どっと押し寄せて、一斉にフラッシュを浴びせた。様々な質問も飛んでいた様だったが、その騒ぎも一応収まると、記者達の要望を入れて高見沢アキら三人の芸の最後の披露が行われた。

来いとゆたとて、
行かりよか佐渡へよ
・・・・・・・・・・

これが唄い納めかと思うと万感胸に迫って、アキら三人は自ら弾く三味線の調べに合わせて、唄っても唄いつくせぬ瞽女の嘆きを絶唱した。

この哀調溢れる最後の瞽女の唄に、聞き入る記者達の間には咳一つなく、唄い終った後の拍手はいつまでも続いていた。

「やすらぎの家」に入所した三人の老瞽女の生活は順調に推移した。厳しい組織と戒律のもとで耐え抜いた彼女達がホームの集団生活になじむのは、一般の自由な

盲老人よりも容易で早かった。

彼女達は口々に

「結構な世の中になったものだ」

と、感謝を言ってホームの生活を喜んでいてくれたが、唯一つ酒井にとって困ったことは、一番の年長者でもあり、芸も達者な師匠格のアキが親の墓参を勧めても、

「行かねえ」

の一言で拒否することだった。

この短い言葉は、七十年に及ぶ厳しい風雪の旅路に耐え抜いたアキの生活の裏面にあるものをのぞかせていた。

このことは、集団生活をする上においては何ら差障りのないことではあったが、酒井にとっては咽喉に刺さった骨の様な思いをさせた。

酒井皓次は、この石の様に閉ざされたアキの心をなんとしてでも開かなければと、ひそかに心に期するものがあった。

その酒井皓次の願望に希望の光がともされる様な事態が訪れた。それは、瞽女の芸を郷土の伝統芸能として後世までも伝えようという世論が持ち上がり、それを習いたいという多数の若い後継者が現れて来たことだった。しかも、アキを国の無形文化財に推薦してはという話も出てきた。酒井皓次は、この話が出始めた時、それを積極的に推し進めた。華やかなマスコミの社会の陰にすっかり忘れ去られ様としている彼女達の芸を再び世の中に送りだして、脚光を浴びさせることによって生きる喜びを感じさせようとした。そうなれば、アキらの気持ちもまた変わってくるだろうとかすかな希望をもった。

（二）

酒井皓次は趣味として、郷土史などの研究グループに加わっていたが、中でも郷土出身の文人の事績に詳しく、その研究熱心さや業績では仲間の間でも高い評価を得ていた。

彼は、ホームに入所したこの三人の老瞽女と生活を共にし始めてしばらくした頃、彼の研究対象の一人である天保期の越後塩沢の豪商でもある文人、鈴木牧之の著した「北越雪譜」という草紙ものに、どうして瞽女の話が全く触れられていないのかという疑問を、ひそかに感じていた。

「北越雪譜」

それは、数多くの書画を残した牧之の中でも、特にその出版に当たっては三十有余年の曲折をへて漸く日の目をみたといういわくつきの草紙である。

その内容というのは、牧之自身の絵入りで豪雪や飢饉に悩む越後の風土やその風土の中で育てられた民話や綺談、悲話といったものを書いて、ただ単に雪を風雅のよすがとしている江戸の人々に紹介しようとした。

牧之ははじめ、山東京伝に草画と草書を送って出版を依頼した。しかし、自信の持てなかった京伝が、出版をするには百両の金が必要だといってきたため、その話は立消えになった。その次に牧之は、更に草稿を改めて、これを当代随一の江戸の戯作者、滝沢馬琴に送った。しかし馬琴も、京伝との交友を理由に、これを断わってきた。それから数年後、京伝の死去の後、草稿を再び馬琴に送った。京伝の死によって、馬琴はそれを断わる理由を失っていたからである。そこで馬琴は、この草稿についていろいろと意見を述べて、終わりにこの草稿の中に

越後の港々の遊女の図説等、海辺並びに、城下宿々も記入すべし

といってきた。

当時、江戸では写楽などの浮世絵が氾濫していた頃のことである。馬琴は余りにも堅苦しい牧之の草稿を読んで、これでは、今の江戸では受け入れられないと考えたのである。

さすが、当時、里見八犬伝を書いて洛陽の紙価を高めていた売れっこ作家らしい意見である。馬琴は書物を出版するには先ず売れるということが必須条件であることを身にしみて感じていたに違いない。

そこで牧之は、馬琴の求めに応じて、草稿を改めて送った。

にもかかわらず、何時とはなくこの話も立ち消えになってしまう。

思うに、改稿された草稿が、馬琴が期待した程江戸の庶民を満足させるにはなお不充分であったのではなかろうか。

こうした経緯の中にも、江戸の戯作者馬琴と地方の堅苦しい学者タイプの文人、牧之の対照が微妙に表れている。

出版を思い立ってから三十数年後、殆ど諦めていた牧之のもとへ、山東京伝の弟、山東京山から、兄の残していたあなたの草稿を名も「北越雪譜」と改めて出版したいと言って来た。そして書簡の末尾に、爛熟した文化のもとで脆弱に流れた江戸の

庶民に北越の厳しい風土を紹介して警鐘としたい、とあった。

馬琴の考えとは、はっきりと一線を画していた。

この「北越雪譜」の始めに出て来る「雪意の章」で、牧之は北越の冬の始まりを次のように述べている。

――陰暦九月の末か、十月の初め頃になると、小雨の降る様などんよりとした曇天が打ち続き、そうしたある朝、突然、山の峰々は雪に覆われる、これを「嶽廻」と言う。その頃になると、海岸の村々では遠く雷鳴の様な海鳴りが聞こえ、山間の村々でも山が鳴動する。これを北越では「胴鳴り」と称する。この「胴鳴り」にさそわれる様に北越一帯に粉雪が舞い降りて冬の到来を告げる――とある。

この草稿を、蒸せ返る様な暑さの江戸の真夏日に読み終えた山東京山は、その暑さも忘れ、肌に粟立つ様な寒気を覚えたと序文に書いている。

酒井皓次は、この北越の厳しい風土と、その風土の中に繰り広げられる人間模様の書かれた草紙の中に、どうして瞽女のことが書かれていないのかと言う疑問を持ったのである。

瞽女は三百年の歴史があると言われている。当然、牧之生存の頃も瞽女はいた筈である。

そこで或る日、郷土研究会の例会が終った後で、松崎を喫茶店に誘って、その疑問を投げかけて見た。松崎がこの地方に転勤以来、越後瞽女については、深い関心を持っていて、インタビューや書物などで瞽女についての豊富な知識を持っていることを知っていたからである。

「確かに、そう言う疑問は残るね、まさに君らしい」

とうなずく様に言ってから、

「同じ盲目でも按摩の福一の話はあるが、瞽女の話の方が遙かに雪国にはふさわしいと思うがね」

年越しの目出度い夜、俳諧仲間が或る催主の家に集まった。すると、その催主の家の窓から盲目の福一という按摩が転げ込んで来た。深雪のため、窓の上が道になっているのである。驚いたお内儀が、「こんな目出度い夜、盲目が窓から落ちて来るなんて縁起でもない」

と、怒ったので一座は騒然となった。ところが、その福一が即興で

「吉方から、福一という小めくら（米倉）が、

入りてしりもち（餅）つくは、めでたし」

と歌ったので、一座の空気は一気に和んで、歌の褒賞に紋付の羽織を与えたという、雪国ならではのユーモラスな話である。

「尤も、こう言うことも言えるのじゃないかな。と言うのは、江戸時代の瞽女と明治以後の瞽女との間には多少の違いがあるんだよ。」

彼の話によると、江戸の頃は、藩はこの地方特有の乳幼児期の失明者救済策として、この瞽女と言う職業を積極的に助け、城近くにその屋敷までを与えて住まわせ、時折彼女らを城内の役所に呼び入れていた。又その頃、門付けの旅に出た瞽女の宿といえば殆どが村の庄屋で、彼女らがその庄屋に着くと、その家の主人から、下男、下女に至るまでが、門に出迎え、風呂も焚いて、下にも置かぬもてなしだったと言う。庄屋達が何故、そこまでしなければならなかったかについてはそれなりの理由があった。当時の支配階級であった藩は、農村を巡回する瞽女達を稲作の出来具合、あるいは農民の生の生活状況などの情報を知るにはうってつけの媒介者であったと言うのである。だから、そのことを知っている庄屋達は彼女らを粗略に扱えなかったのである。

「鈴木牧之とて、恐らく町役人の一人だったろうから、瞽女を扱うのを遠慮したのではないだろうか」

そんな話は、酒井皓次は初めてだった。言われてみるともっともな話である。

しかし、酒井皓次は別のことを考えていた。

「成る程、そう言うことも十分考えられるが、あの草紙が出版される経緯とか、牧之の性格などから、こんなことも考えられるんじゃないだろうかな」

それは前にも書いた様に、牧之の人柄が学者タイプの性格で、遊芸関係には殆どといってよい程無関心であったと言うことである。

初めに、牧之は馬琴のすすめで草稿を改め、港や宿場の遊女の図や話を入れて馬琴のもとへ送るが、それでも尚、馬琴の意に即しなかったとみえて話は再び沙汰や

みとなり、最後にやっと京伝の弟、京山によって出版されたと言うことは前にも触れたが、京山は馬琴と違って、はじめから、江戸の庶民に警鐘を鳴らすために出版した。

「だから、もし馬琴のところへ改稿して送った草稿が出版されていたら、遊女などと一緒にのっていたかも知れないのだ。」

「なかなか、うがった推理だな。まあしかし今となっては、その程度のことしか言えないって訳だよな」

こうして二人は、いろいろと議論をたたかわしたが、結末は、二人とも雪国の風土を書いた「北越雪譜」に瞽女の話が見当たらないと言うことは、一寸淋しい思いがするということで意見の一致を見た。

話が一段落したところで、松崎は煙草に火をつけて一服吸うと、ゆっくりと煙を吐きながら問いかけて来た。

「ところで、例のアキさんの墓参りの件はどうなっているの。少しは前向きに進んでいるのかい」

アキの墓参の件については、以前にそれとなく話したことがあった。

「それが、まだ、うんと言わないので困っているんだ」

「そりゃ、そうだろう。あの苦難の人生を、それも仲間の面倒を見ながら耐え抜いて来たんだ。並み大抵の意地では出来ないことだよ。そのアキさんの気持ちを変えようと言うのだから、これも並み大抵のことではないよ」

「でも、俺は希望を持っているよ」

「ほう。いやに自信のある言い方だな」

「俺は、アキさんを信じている」

「根気のいる仕事だ。しかし、もしそうなれば酒井、これは素晴らしいニュースだぞ」

松崎の声が大きくなったので、思わず松崎の顔を見直した。その声の中に、ニュースを追う記者としての職業意識を感じたからである。酒井は、早々に話を切り上げて別れた。

高見沢アキ　（三）

生後、三ヶ月で「ソコイ」で失明。二才で父親を失い、五才の時に瞽女の師匠にもらわれる。その時の母親の心情ははかるすべもないが、五才にして母親と別れなければならぬアキの心細さは察して余りがある。

「歌がまずいと叱られ、七つの時から二十一までは、いつもノドから血が出ていた」と述懐する。

九才の時に、初めて門付けの旅に出た。

「一日に八里から九里の道を歩いたこともあった」

八十里の県境を越え、会津へ抜けたのは母を失った十一才の時であった。

アキは、よく「やすらぎの家」の職員に

「次の世は虫になってもいいから、明るい目をもって生まれて来たい。自分の思うところへも一人で行けねえもの」

と言っていた。

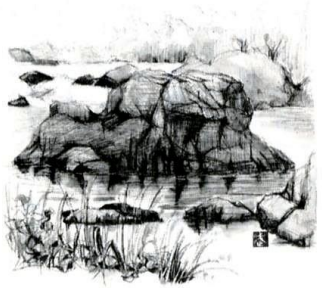
アキは一度だけ、淡い恋心を抱いたことがある。二十才を過ぎた頃である。アキの美貌は瞽女の間では有名であった。行く先々の村では、アキは若者達にもてた。しかし彼女は、決してそれに溺れなかった。夜の席になると酒も出るし、唄を教えてくれと寄って来る若者もいる。そこに自然、人間的なつながりが生じる。そうした若者の中で、北村節雄と言う或る旧家の若者がいた。彼は、教育もあり他の若者とは違って淫らがましい行為もなく、節度をわきまえてアキに親切にしてくれた。アキは、そうした節雄に好意をもつ様になった。或る年、別れる時に節雄は

「アキちゃん、気をつけて行くんだよ」

と言って、そっとお守袋をくれたこともあった。はた目に見てもそれは親切をこえていた。その時、アキは思わず胸に血の騒ぐのを覚えた。しかしその翌々年、節雄に婚約者の出来たことを知らされた時、アキの心は乱れた。所詮は、節雄の親切も盲目なるが故への憐れみであったのだと思うと、みじめさと悲しみが交錯した。

丁度その頃、アキと同年輩の片桐オギノが川に身を投じて自殺すると言う傷ましい事件が起きた。属する家は違っていたが、瞽女仲間ではオギノは当時、アキと共にその美貌と美声を謳われていた。色白で細っそりとした風情が、村の若者達の情熱をそそった。賢いオギノは、彼等にさからうことなく巧みにあしらっていた様だったが、情にもろい彼女の周辺にはいろいろと噂が流れていた。オギノが二十才になった年の冬、彼女の顔色が冴えないのを周囲の人々は気づいて案じた。しかし、

彼女はただ
「春さ来て暖かくなれば、また元気さ出るだ」
と答えて、口をつぐんだ。
そして、厳しかった冬もようやく去ろうとした頃、突然の様に春まだ浅い渋海川に身を投じた。身ごもったオギノは、相手の男の名も告げずに自らを清算した。
人々は、オギノの死を憐れんだ。
それを聞いたアキの衝撃は大きかった。
アキは、もしも自分が北村節雄の親切に溺れていたらと思うと、オギノが自分の身代りになってくれたのではないかと錯覚に陥った。アキは、オギノが、たまらなく、いとおしかった。
その頃から、アキの顔からは明るさが消え、芸の虫と言われる程に修業に励んだ。彼女の芸は、持って生まれた美声と相まって、益々磨きがかかって来た。しかし、後年ある評論家がアキの唄を評して、
――アキの唄は、人の心に切り込んで来る様な鋭さがある――
と言った。つまり、鋭利な刃物の様な冷たさが感ぜられると言ったのだろうが、アキの厳しい過去を振り返る時、あながちそうでないと言い切れないところがあったに違いない。
アキがまだ二十九才の時に、師匠が早死にした。アキは他家に移ることを考えたが、他の弟子達は、アキが後継者として後を守る様に口々に勧めた。自分の若さを考えると、自信のなかったアキは固辞したが、それはゆるされなかった。更に苦難の旅が始まった。その年から七十才を過ぎる迄、アキの門付けの旅は続いた。
以上が、一般に知られているアキの素顔である。
酒井皓次は、そうしたアキの過去のうち、墓参を拒否する最も大きな原因は、むしろ瞽女に弟子入した五才から母が亡くなるまでの六年間に、母娘の間の複雑な心の屈折にあるのではないだろうかと、ふと思ったことがあった。それで、それとなく小森ミチと桑原セキの二人にその頃のことについて尋ねてみた。しかし、三人がそれぞれ互いに故郷が違うため、当時のことは何も分からないが、唯アキさんの母親はアキさんに似て美人であるということは、よく聞いたということぐらいであった。酒井皓次は何んとなく、それ以上に、立ち入るのがはばかられた。



こうした時に、酒井皓次に降って湧いた様な福音が訪れたのである。それは前に述べた様に、瞽女の芸を郷土の伝統芸能として若い後継者達に受け継いで行こうと言う話であった。
酒井皓次の予感は当たっていた。アキらの表情には、生々としたものが蘇ってきた。教えることに喜びを見出したようだった。アキらは口を揃えて言った。
「辛い門付けの旅を思うと、こんな楽しいことはない。生きていてよかったと、つくづく思う」
心なしか最近のアキの唄には、ある評論家が言った『切り込んでくるような冷たさ』が次第に影をひそめていくように思われた。
酒井皓次は、アキの墓参もそう遠い話ではないと、ひそかに心をときめかせた。

（四）

そのアキの墓参は、意外に早く実現した。
それは、小森ミチの死が一つのきっかけになったようだった。
三人の中で最も病弱であったミチは、病床に伏して僅か三日ばかりしてこの世を去った。死因は、老衰による心不全であった。長く苦労を共にしたミチとのあっけない別れであった。
アキは、年上の自分が生き残ったことを悲しんだ。このミチの死によって、アキの心にも何か期するものがあったようである。
その翌年の春、まだ残雪が北国の山の嶺々に輝いている頃、アキの口から、
「おらも、この彼岸には墓参りさ、したくなっただ」
という言葉が出た。何時かは聞ける言葉だとは信じていたが、アキの口からその言葉を聞いた時、自分の気持ちとは裏腹な言葉が出た。
「アキさん、そう急がなくてもいいよ。アキさんはまだまだ元気なんだから」
「いいや、酒井さんの言葉はありがてえと思っていただ。でもよ、もう、おらも年

だ。意地をはるのも程々にしなきゃ」
「・・・・・・・・・・・・・・」
酒井皓次は無言のまま、アキの手をしっかりと握りしめた。

こうして、アキの墓参は四月の彼岸に実現した。
その日はアキの気持ちを察して、同行者は女子職員の吉沢節子と酒井皓次の二人だけとした。車の中で、アキは終始無言であった。酒井皓次も吉沢節子もアキの気持ちを察して話しかけなかった。
墓地で車を降りた。
四月とはいえ、北越の野を吹く風は冷たかった。アキの記憶を頼りに草むらを分けて探した。
あった。
おそらく、父親の死んだ時に作ったものであろう。七十余年の歳月で苔むして黒ずんだ小さな墓石が、草むらの中にひっそりとたたずんでいた。
「さあアキさん、お父さんやお母さんの墓ですよ」
吉沢節子がやさしく声をかけて、酒井皓次と二人で両脇から抱えるようにして墓の前に連れて行った。
アキがさぐる様に両手を出したので、吉沢節子が傍らからその手をそっと墓石に近づけた。
アキは、両手でまさぐるように墓石をさすり始めた。
しばらくすると、嗚咽とともにアキの口から言葉が洩れた。
「おっとおさ、おっかあさ、会いたかっただ。たった一目だけでも・・・」
そう言っているように聞こえた。その言葉に誘われるように、こらえていた慟哭が一度にドッと堰を切って溢れ出たかと思うと、波打ったアキの身体が墓石に崩折れ、指先がその石に食い込んだ。嗚咽は、いつ果てるともなく続いた。

その翌日、事務室の机上の電話がけたたましく鳴った。
吉沢節子がとると、
「はい、一寸お待ち下さい」
と言いながら、目くばせをして受話器を酒井に渡した。
「松崎さんからです」
受け取った受話器から、いきなり松崎の精力的な声が飛び出してきた。
「どうして、知らせてくれなかったんだ」
いずれは分かるものと思っていたが、こんなに早く松崎の耳に入るとは思わなかった。
「あ、、松崎か」
「松崎かじゃないよ。どうして、アキさんの墓参を知らせてくれなかったんだ」
その激しい語調の中に、シャッターチャンスを逸した記者としての無念さがありありと表れていた。
「どうして、それがわかったんだ。さすがだな」
話を延ばしながら、適当な言い訳を考えようと思っていた。
「感心している時じゃないよ。どうして、知らせてくれなかったんだ」
松崎は執ように食い下がってきた。
「・・・・・・・・」
どうしてもアキさんをカメラの前にさらしたくなかった、と言えなかった。
「いつだったか、牧之は瞽女の話をなぜ「北越雪譜」に載せなかったのかと疑問を提起したのは、どこの誰兵衛だったかね」
草紙だって、当時の社会では立派なマスコミではないかという松崎の辛らつな言葉だった。
言われてはじめて、机に向かって「北越雪譜」の草稿に取り組んでいる牧之の後姿が浮かんできた。
「まあ、すんだことは仕方ないさ。アキさんにとっては感激の一日だったんだから、喜ばなきゃ」
言葉がやや平静にもどって来た。
「ありがとう。この償いは、また何かでさせてもらうよ」
「牧之だの、何だのと言うことはないさ。つまるところ、俺は俺で真実の姿を追求しようとしたし、お前さんはお前さんでアキさんをかばおうとしたってわけさ」
「まあ、そんなところで勘弁してくれよ」
「それじゃまた、よろしく」

言うだけ言うと、後はさばさばとした口ぶりで受話器が切れた。

北越の冬は早い。

昭和〇〇年十一月の中旬、初の寒波が襲来した。ある日、高見沢アキはふとした風邪がもとで病床に伏すと、肺炎を併発した。診察した医師は要注意を職員に指示した。

医師や職員らの懸命の看護にもかかわらず、二日、三日と高熱は一向に下がらず、高齢のアキの体力は徐々に衰えを見せ始め、枕辺の医師の顔にも次第に濃い憂色が漂い始めた。

容体は刻々と悪化した。

もはや、死は時間の問題のようであった。アキの口からも、別れの言葉がもれ始めた。

「皆さん、お世話になりましただ。有難うごぜえました」

枕辺には、嗚咽の声が洩れ始めた。そして、最後の気力で

「わしが死んだら、骨は、親の墓に一緒に埋めておくんないしょ」

と言い終えて、息を引きとった。

その日は、朝からどんよりと曇った空のもとで遠くの山々の頂は雪景色ににぶく輝き、昼を過ぎる頃から「北越雪譜」の『雪意の章』にある様に、北越特有の冬の到来を告げる胴鳴りの響きが物佗しくかすかに聞こえ、アキの眠る窓辺には夕暮れの粉雪が舞っていた。

その翌日、アキの死はA新聞の地方版のトップに「越後路最後の瞽女逝く」と大きく報ぜられていた。記事は、アキが盲目という障害を乗り越えて瞽女の芸と、後輩の指導に生涯を捧げた、とその功績をたたえ、終わりに、

——彼女は、永遠の眠りについてはじめて、この世の苦難をのがれ、温かい父母の懐に抱かれた——と結んでいた。

ワラビとガンの話

北川泰子

「日本人は、ほんとうにワラビが好きですね。発ガン性があると発表しても、摂取量はいっこうに減らないのですよ」とは、平山雄先生（国立ガンセンター疫学部長）から八年前、大阪の栄養学研修会で聞いたことです。

ワラビを生食する家畜に膀胱ガンや腸ガンが多いことが注目され、動物実験によってワラビに発ガン物質が含まれていることが確かめられました。

「しかし、まあアク抜きを充分にすることと、春に数回食べるくらいなら大丈夫でしょう」とも話され、「アク抜きを充分にとのことですが、どのくらいに？」とお尋ねすると「木灰か重曹でアク抜きをしたうえで、もう一度ゆでこぼすことが必要です」と答えて下さいました。

それ以来、アク抜きに充分気をつけて春の味覚を楽しんでいます。

山菜ごはんには、ワラビは無くてはならないし、卵とじもなかなかよく、これは少し甘くちに仕上げたほうがおいしいですね。

もう一つ、これは四国讃岐の民宿で供されたひたしたものですが、アク抜きをしたワラビを三センチぐらいの長さに切っておく。おいしいだしをとり吸い物よりも濃いめに味をつける。小鉢にレモンの薄切りを敷き、その上にワラビを盛りつけ、だしをはる。天盛りはけずりかつおを少々。レモンをつついてほどよい酸味をとけ込ませながらいただく。香りも色どりも抜群の一品です。一度お試しを。

ガンの話にもどりますと、ピーナッツなどの豆類に生えるカビはアフラトキシンという毒素を出し、これが強い発ガン性をもっていることが分かり、カビの生えたものはさけた方がよさそうです。

その他、魚や肉のコゲにも発ガン性物質が含まれているとか、魚とつけものなどの野菜を同時に食べると発ガン性物質が胃腸の中で生成されるとか発表され、おどろきましたが、ビタミンCがそれらを抑えることが証明され、野菜や果物を同時に食べることが勧められています。肉や魚や野菜や芋のおかずに、ミカンやイチゴも添えてある、ちょっと上等の幕の内弁当のような食事がよく、その上に牛乳を加える、ホウレンソウ、南瓜、ニンジン、青ネギなどの有色野菜をつとめて食べる、煙草をやめる、を心がければかなりのガンからのがれられることがわかりました。

「なにがこわい」「なにがいけない」よりも「一つのものに偏らない」「いろいろのものをとり合わせる」が大切です。

随想

鎮守の森にて想う

文学会
根岸元彦

（照葉樹林）ということが言われる。広辞苑で索いてみると（亜熱帯から暖帯にかけて見られる、常緑広葉樹を主とする樹林）とある。この地帯における文化の特殊性を、京大系の上山とか中尾とかの学者が取り上げて論じたので、一躍クローズ・アップされたものと記憶する。我が国などは全部この文化圏に入るらしい。照葉樹といえば、例えば椎、樫、楠などが代表的な樹種である。

この照葉樹林帯では、放って置けば土地は皆照葉樹林になってしまうのだと、或る農林学者から聞いた。日本の野原が放って置けば皆、薄原になってしまうのと同じ理屈である。照葉樹林がこの地帯での最も自然な植物景観なのである。

我々は周囲の山々を見廻して、杉や檜が多いのを見て、これが自然の姿かと思うが、そうではない。これらは人間が植林したからあなっているので、自然に放って置けば、杉や檜は勝手に生えて来たりはしない。何百年か後には樫や椎が勝って、照葉樹林となってしまう。これが自然の植生の姿であるそうだ。

この農林学者は、姫路の新日鉄の顧問をしていた人で、この会社がかつて、工場地帯と住宅地とを分離する為に、その間に緑地林帯を作る事を計画した時、

「日本の樹木の代表は照葉樹だから、樫の林を造成するのがよい」

と提言した。そして樫の実を播いて実生の苗木を作り、それを植樹するという遠大な計画を樹てた。そこであちこち樫の森を探したが、仲々適当な森が見つからない。色々思案した揚句、自然の森といえば鎮守の森しかないだろうから、神社境内の森を目当てにしたらどうかと思い付き、あちこちのお宮を探して遂に、私の奉仕する山崎八幡神社の境内林を発見したのだという。

そうして例年十一月頃になると、新日鉄の従業員家族が、バス何台かを借り切ってやって来る。銘々が袋に一杯樫の実を拾って帰ってゆく。境内で弁当を食べ、子供達は一日ドングリ拾いに興じて、社員家族の慰安行事にもなっていたようだ。この事業は所期の目的を達成したのか、この行事も数年前から止んでしまったが、ドングリ拾いは子供の遊びの一つだから、秋になると隣りの幼稚園児が、しょっちゅうやって来て拾っている。ドングリは喰べられるものではないから、あれを持って帰って、どうしてしまうのか知らないけれど、椎の実なら喰べられる。境内には数百年を経た椎の古木があって、私も子供の頃よく椎の実を拾って、ホウロクで炒って喰べたものだ。懐しい子供の頃の喰べ物の一つである。

秋になって樫の実が落ち初めると、境内一杯にコロコロと散り敷いて、参道も歩きにくくなるほどである。こんなに沢山の実を毎年稔らす訳だから、遂には他の樹木は抑えられてしまって、照葉樹だけがはびこってしまうのも、道理であろうと思われる。

八幡神社の境内林をなしている照葉樹は、主として楠と樫とである。椎は数本しかない。この内楠は、町立幼稚園の中を通っている裏参道から、弁天池に通ずる細道の両側に密生している。尤も幼稚園の裏山にも同様に植っているのだが、この楠は百年程以前に、西町の本家門前屋の三代前の主人が、その頃は前野家の別邸であった、現在の山崎幼稚園と、八幡神社の裏参道とに植え込まれたのだと聞いている。

ちなみに当時の裏参道から楠風閣を含む、弁天池に通ずる参道の東側は、まだ神社の境内ではなかった。当時、本来の境内地とは皆国有地であって、この一画は明治の末頃に、個人の寄附によって付け加わった民有境内地で、後に国有地に編入された土地である。だからこの一画は寄進された土地毎に地番が異っている。

幼稚園の園舎と運動場の間の道路から北、弁天池までは戦前はすべて田圃で、神社の神饌田として神社有地だったのが、農地改革の為に神社の手から離れた。幼稚園の中を通る町道は、昭和十三年に神社が所有地を埋め立てて裏参道として造成し、税金の関係があって町道として寄附したもので、運動場は戦後になって作られたものだから、あんな格好になっている。

照葉樹の中でも楠は、非常に成長の早い樹種である。元来が暖帯地方を主産地とし、戦前では台湾あたりの特産だったようだ。我が国でも南国九州方面に大樹が多い。私が知っているものでも、若い頃（大宰府天満宮）の境内で見た大木など、根

元の幹の太さは、切れば四畳半敷けると言われていた。瀬戸内海の大三島に在る（大山祇神社）の御神前の楠の神木は、何人が手をつなげば取り巻けるものやら、分らない程の太さである。

八幡神社の裏参道の入口にある楠でも、僅々百年程であるのに、太いものでは二抱え程にも育っている。戦前は樟脳の原料として、虫除け薬を製造されたことはよく知られている。昔はタンスの抽き出し板に、虫除け用としてよく使われたと聞いているが、太古にはさぞ大木が沢山生えていたものだろう。奈良時代では前期の宮殿建築には、楠が大木として喜ばれ、用材として主に使用されたらしい。しかし成長が早いだけに材質が柔かく、耐久力に欠くる所があったのか、後には檜の美質が認識されて主建材となった。現在でも楠はどんな大木でも、建築用材とはならないようだ。

奈良に住んでいる人間国宝の、西岡という宮大工の棟梁の言によれば、

「檜は伐って建てた時が一番弱く、建ててから五百年程で最も丈夫になる。千年の樹齢の檜建築は千年保つものだ」

といっている。近頃の鉄筋コンクリートの建築物が、最も永く保っても百年足らずであるのと、何という相違であろう。引原ダムの耐用年数も凡そ百年程の寿命であるという。そうなればもう後七十年余りの命しかない。千年の檜材を使って建てられた法隆寺が、千年後の今日健在な姿を保っているのも、むべなるかなである。

ここに日本建築と西洋建築の根本的な差異がある。日本のまともな木造建築は、百年、二百年と経つほどに、侘びと渋みが加わって味が出てくるが、コンクリート建築は、薄汚くよごれてくるばかりである。しかし日本の木造建築の最大の弱点は、火に弱いことである。古来どれ程の古社名刹豪邸が灰塵に帰したことか。

同じく照葉樹といっても、成長の早い楠に較べて、仲々太らないのが木斛である。前栽の庭木として喜ばれ、いずれも照葉樹である木犀、木斛、樫、要と並び称されて、庭木の代表的な樹種とされる。木の姿が美しく素直で、丈夫で手入れがきいて整形し易く、徒長しないのが珍重される所以であろう。仲々木が太らなくて、大人の腕程になるにも随分年月がかかる。

八幡神社の御神木となっているのが、この木斛の木である。目通りの高さで周囲が二米程もあり、こんな大樹はどこにでもはない。先年、県から天然記念物として指定された。県指定というから何か補助金でも出るのかと思ったが、まだ一円の肥料代も貰ったことがない。従って何の宣伝もしないから、余り人には知られていない。同じ県指定の天然記念物といっても、こちらは御神木で地味なものだから、大歳神社の千年藤とは性質が違う。

神社の御神木とはどんなものかというと、太古の原始神道の時代、まだ神社に神殿を建てて、そのお堂の中に神様をお祠りするといった、現在のような形式が出来ない以前には、人々は天の上や、山の上に居られると考えられていた神様を、春になると里にお迎えし、冬には山へお還り願うといった形を執っていた。そして里へお迎えした神様が鎮座される処、つまり憑り着き所とされるのが、皆のよく目につく奇岩や大石の上であったり、大樹の梢であるとされていた。神社が神殿を造営して、その奥に常時神様が鎮座されるようになったのは、宗教文化が進んだ大分後世で、日本の歴史が始まる少し以前ぐらいの事である。

以上のことは、柳田国男の民俗学的研究を参考にしたものであるが、このように神様が鎮座される大岩を磐座といい、蔦沢の岩上神社が、巨岩の上に建っているのはその意味で、こんな岩神さんは各地に残っている。有名なのは福岡県の（宗像神社）の（沖の島）で、海の正倉院とも言われ、島内の巨岩奇石の陰で神様をお祀りした跡から、今でも沢山の祭具や神具の貴重な宝物が掘り出される。

又奈良の（大神神社）では、現在でも三輪山全体が御神体とされ、ここではだから普通の神社のような御本殿が無い。御神体の山を礼拝する為の拝殿があるだけである。まだ神殿というものの無かった頃の、最も古い神社形式を残している。

それから御神木についても同様で、その土地での最も立派な大樹を選んで、神様をお迎えした名残りである。御社殿が出来て神様が常に鎮座されるようになった後世でも、神様が憑られる霊木として、境内の一番の大木を御神木として、太古のまの風習を伝えている。地鎮祭其の他の野外の神事で、正面の榊の木に御幣を付け、神様の降神を願うという神事も、この意味に由来しているのである。

山崎八幡神社が、加生の故社地から現在地に遷座されたのが、かの（応仁の乱）で有名な応仁元年であると伝えられているから、今から約五百年前である。その時この木斛が御神木として選ばれているということは、その時点ですでにこの木は、他を圧する大木に育っていたことを意味する。他の神社では成長の早い、杉や檜の大木が御神木として選ばれているのが普通だが、仲々太りにくい木斛が大木として選ばれているという事は、もうその時点で何百年もの樹齢であったことが推察され

る。従ってこの御神木は、恐らく千年、或はそれ以上の樹齢を有する老樹ではないかと思われるのである。

だがこの木斛には、葉に虫が着いて困るのである。葉を丸めてその中に蛹が棲んでいる。春先にこれがかえるとその幼虫が、若葉を喰い荒してしまうのだ。この害虫駆除の為の消毒と、寒中に根の周りに施す肥料とで、毎年相当の費用がかかるのが頭痛の種だ。

それに今一つ厄介なことは、この楠や樫の落ち葉である。街の人は常緑樹というので、年中青々としているから、落ち葉のことなど気が付かないかも知れないけれど、四、五月頃に一斉に落葉して若葉と入れ替るのである。僅か二ヵ月程の期間に、森の中の葉がほとんど落葉してしまうのだから、それこそ大変である。沢山の樹々から一日中、ひっきり無しに葉が落ちて降り積んでゆくから、いくら掃いても切りがない。今日きれいに掃除しても翌日には、どこを掃いたのかと思う程に、昨日と同じように降り積って、全く情無くなってしまう。まるで賽の河原の石積みのようなものだ。

しかしこれも二ヵ月程悪戦苦闘すると、すべて若葉に入れ替って終る。若葉を透して漏れる五月の陽光の美しさというものは、又格別な輝かしさである。

この落ち葉は集めて、境内のあちこちで燃してしまうのだが、社前の広庭のは玉垣の間から、林の中へ掃き出す場所がある。そこは長年の落ち葉が積み上って、絶好の腐葉土となっている。この土は癖のない天然自然の腐葉土なので、菊作りや盆栽作りの鉢には最適らしく、好事家がよく掘りに来られる。私の処へ申し出て来られる方には、一番適当な場所を教えてあげるのだけれど、中には何の断りもなしに、林の中を散々掘り荒して、黙って持ち帰ってしまう人もある。そんな心掛けの人が盆栽を作っても、どうせまともに育つはずがなく、ヒネコビれたものになってしまうだろうと思うのだが、盆栽はヒネコビれたものが喜ばれるのだから、それも理に叶ったやり方なのかなと思ったりする。

またこの照葉樹の強靭なことといったら、信じられない程である。樫や楠など、枝葉を切り落して電信柱のようになっても、翌年の春にはあちこちから芽を出し、数年経てば元のように枝葉が茂ってしまう。戦争中神戸の湊川神社や、生田神社が全く焼失したが、一番最初に芽吹いて生気を取り戻したのが、楠や樫の森であったのを記憶している。矢張り庭木としても、幾ら切り込んでも木が余り傷まず、思いのままに整形出来るという、照葉樹の生命力の強さが喜ばれて、珍重されるのであろうと思う。

境内の樹木については、一木一枝だに手を加えないで、自然のままに保存するというのが、私の考え方である。伊勢神宮の内苑が、自然状態で保存されているのと、同じやり方である。だから境内では枯損木になったり、余程の必要が無い限り木は伐らない。よく境内の木の根が玉垣を持ち上げたり、石垣を崩したりして損ずることがあって、木を切ってしまおうと言われる事がある。しかし木は切ってしまえばおしまいだが、玉垣や石垣は積み直せば済むことだから、生きた木は切らない。

私が余りにも境内の木を切り惜しむものだから、

「境内の木は一本だって、あんたのものになる訳じゃなし、そう神経質にならなくてもいいだろう」

と言う人があるが、私はそうは思わない。今までも社殿の修理とか、何かの事業で資金が必要な時に、境内の樹を伐って費用を生み出し、寄付金の足しにしようとの議がよく起った。これは最も安易な道ではあるが、しかしその度に木を切っていたら、宮山の檜などすぐ伐り倒されて、坊主山になってしまうだろう。だから私は余程の事が無い限り、宮山の木は切らない事に心掛けている。

鎮守の森とは、神社の缺くべからざる景観であって、境内の環境や、尊厳を維持する為には、無くてはならないものである。鎮守の森があって始めて神社は、その奥床しさや尊さを深めることが出来る。だから我々の先祖は何百年もこの森を守り、維持して来たのである。私の代になってそのしきたりを壊すなど、私には到底そんなことは出来ない。

鎮守の森とは、我々の家で言えば座敷の前栽の植込みと同様である。幾らお金が無いからといっても、庭木を伐ったり賣ったりして、それで家の普譜をする人があるだろうか。私はそのように考えている。

話が横道へ行ったが、八幡神社の社殿までの岡は、大体が照葉樹林を主とした森を成しているが、社殿の裏山一帯はすべて檜の森となっている。今年の春頃、元禄時代に建てられた能舞台の復元修理をする為に、どうしても必要があったので、その建築用材として数本の檜を伐って使用した。大工の職人が年輪を数えてみると、どの木も二百五十年から三百年の樹齢であるという。杉など他の樹種だったら、一宮町の伊和神社の森のように、二米も廻る程の大木に育っているはずだと思うが、

自然林であるのと、余りにも密生しているのとで、皆幹が曲り、ヒネコビれて、どれも周囲一米にも足らない木ばかりである。しかし木目の細かいこと、あぶらが廻って見事なピンク色の光沢であることなど、大工の職人が、

「こんないい木材は、そこら中どこを探しても、手に入るもんぢゃない。もう銘木の類ですよ」

と言っていた。

今年の春先に、氷上郡から檜皮を剝く職人が来て、境内中の檜の皮剝きをした。檜の皮はヒワダと言われ、外側の固い鬼皮を、十年に一度ぐらい剝いてやる。木の成長を助け、虫がつかなくて、木の為によいのだそうである。そして檜皮屋はその檜皮(ひわだ)で、社殿の檜皮の屋根を葺く。その職人に数えさせてみると、山全体の檜の数は、四百本余りあるそうである。

この山は元々檜山であったはずはなく、元は植林されたに違いない。八幡神社がこの地に遷祠されたのが、五百年前の応仁元年というから、その頃に裏山全体に檜の植林をしたものだろうか、十一月頃この宮山の永久保存の方法について、県立林業試験場に依頼して、場長以下三名の技師によって、調査研究をしてもらった。その時の話では、この山の檜は最初植林されたものだが、既に二代か三代の代替りをして、もう今では、自然林の檜山になってしまった、とのことである。戦時中に木造船を造る為というので、木材の供出を命ぜられ、目通り五尺以上の木は、何十本かが伐られてしまって、今では太い木は見当らない。しかし別に用材にする訳でも無いのだから、それはそれで構わない訳だ。

今新宮方面から県道を宍粟郡に入り、比地ヵほきの辺から一望すると、完全な盆地をなした山崎町の景観が開けてくる。この盆地を取り囲む山々を見廻してみても、樹らしい木の生えている山といえば、八幡山の鎮守の森だけである。先祖代々の氏子達が、神域として守り育てて来たお陰で、今日これだけの森が残されて来たのである。

近頃緑を大切に育てようとか、森林浴とかの新しい言葉が、声高く叫ばれているが、只掛け声ばかり賑かに言ってみても、百年や二百年では豊かな緑の森林は生れない。鎮守の神様を大切に崇敬する、代々の敬虔な氏子達と、此の森をあくまで守ろうとする頑固な神主が居て、始めて鎮守の森はいつまでも残ってゆくのである。

◀川戸獅子舞保存会

芸能祭に弾(はず)みを

事務局　長川耕一

第九回秋の芸能祭（62・11・23）は、新装の山崎文化会館で、各部門ごと、日頃の練習の成果を披露していただきましたが、予想以上の観賞者で賑わい盛会であったことは、関係者のご尽力によるもので厚くお礼申し上げます。

山崎文化会館での初舞台が成功したことは大変よろこばしいことではあるが、第十回（63・11・23）以降を、どう展開させるのかが問題ではないでしょうか。

定着しつつあるこの芸能祭を育て前進させるには、「山崎町の芸能祭は」「山崎は芸能の町や」と芸能に対する親しみを高める必要があるのではないか、このことは各部門の後継者の育成、発展に繋がるものではないでしょうか。

「芸能祭に弾み」をつけ山崎町の芸能価値を高めようではありませんか。

短歌

ともしびの賞の受賞を祝う

山崎歌話会　北川　ちゑ子

菊薫る今日の日誌の冒頭にともしびの賞の君をことほぐ

十一月十四日の新聞に、藤村省三先生が兵庫県からともしびの賞を受賞されることに決定したという記事を見て、永らく待望していたことが実現した喜びを詠んだ歌です。その日、庭の白菊の大輪が朝日に輝いていました。

県公館で贈呈式のあった翌日の十九日、早速およろこびに駈けつけて見せていただいた表彰額は、金色の銅板に、「永年にわたり各地の短歌会を指導し、その普及や後進の指導にあたるとともに、幅広い知識と経験を生かして文化団体の育成に努めるなど、地域文化の向上に尽されました。」の字句が刻まれていました。

先生は昭和二十一年の春、大阪から山崎高等女学校に転勤された時、女学校で中断していた「草の実短歌会」を復活されたのが山崎に於ける短歌活動の最初で、同時に山崎歌話会に加入、毎月の歌会で適切な批評をしていただいていたが、特に五十年に二代目会長となられてからは、その献身的なご指導によって、会員の作歌力は見る見る向上し、会員数も増加して今日の隆盛に至りました。

これとは別に、四十八年に県が生涯教育の一環として伊和高校に開設した地域大学の「短歌の集い」の会員の引続いて勉強を続けたいという希望により、「新樹短歌会」を組織して熱心な指導に当たられました。その甲斐あって、県下各地の短歌大会に於て、新樹会々員の入賞入選者の多いことは目をみはるばかりです。

その他、県歌人クラブ結成以来の幹事として、西播磨短歌祭実行委員長として、宍粟郡歌人連盟代表としてお忙しい体にも拘らず、西播磨老人大学講師、学校厚生会短歌教室講師や、安富短歌会の指導者として後進の育成に努められています。

私は、四十年の永きに亘り、先生の懇切な、時には厳しいご指導をいただいておりますが、短歌を作ることによって、如何ばかり心の張りをもち、生きる喜びを持たせていただいたことでしょう。中でも、歌集「小春日」の出版に当たりましては、選歌から校正まで一方ならぬお世話になりましたが、同様に、大井秀子さんの「せせらぎ」も、松本寿賀子さんの「香塵集」も、安井俊二さんの「遺歌集」も、在賀彦一さんの「石工の歌」もみな先生のお世話によって出来たものであります。

この度、先生のご受賞に当たりまして、心からお祝い申しあげ、今更のように有難く思うとともに、いつまでもご健康でご活躍されますようお祈りいたします。

第六回宍粟郡民短歌祭の記

第六回宍粟郡民短歌祭は、山崎文化会館の落成を記念して、真新しい会館の研修室で、十一月二十九日に催された。出詠一〇七首出席六四名。定刻の十三時三十分に開会され、主催者挨拶、田中市郎県議の祝辞に引き続いて、藤村省三・稲村幸子両先生から出詠歌の一首一首について、熱のこもる懇切な講評がおこなわれ、出席者はみな満足な様子であった。そのあと質疑応答があり、十六時からは入賞者の表彰に移った。

知事賞、県会議長賞、県会議員賞を田中県議から、町長賞、町教育委員会賞を安井町長から、町議会議長賞を朱山議長から授与された後、神戸新聞社賞、山崎町文化連盟賞、宍粟郡歌人連盟賞が主催者から手渡された。なお入賞者十四名中、山崎歌人協会（山崎歌話会、新樹短歌会、かしわの短歌会）所属の会員は十一名を占めていた。入賞者とその作品は別掲の通りである。

大谷吉次氏を悼む

新樹短歌会主宰　藤村省三

十月十一日に、かねて療養中であった大谷吉次氏が逝去された。氏は五十年に「短歌春秋」に、五十四年に「国民文学」に入会。新樹短歌会の一員として私の指導を受けるようになったが、その初期から農民の哀感を詠んだ作品に優れたものがあった。五十九年に出版された合同歌集「新樹」の冒頭に次の作品がある。

目印に草を千切りて畦に挿す今日はここまで稗を抜き来し

暮るるまでに刈り終りたき畦の草はや露もちて袖口濡らす

勤めより帰りて妻が畑に撒く硫安の粒夕日に光る

背広着ておちつかざるは五十年農営める性としおもふ

地下足袋に藁敷き入れて鋤きてゆく夕べの冷えの早くなりし田

最後に晩年の作品を掲げ、将来を嘱望されていた氏のご冥福をお祈りする。

注射のあと採血のあと皆消えて癒えた

き願ひ花の季過ぐ
脈搏のみだるる歩み遅遅として目標とする栗の木遠し
咳出づることなく代田掻く夢にゴム長靴が足に重たし

各地短歌会入賞入選作品

◇兵庫県春季短歌祭

（四月二十九日・神戸市婦人会館）

●兵庫県歌人クラブ賞

良きことに履くは少なくなりたりと濯ぎし足袋の小皺を叩く　森　つな
山峡に木を伐る音の絶えてより湧くごとく降る雪となりたり　森本萬千子

●半どんの会賞

大声で昼餉に呼べば廐にて夫より先に牛がふり向く　中田　博子

●神戸市教育委員会賞

亡き夫が壁に記しし配合法読みかへしつつ農薬計る　大崎喜美恵

●入選

待ち切れぬ牛叱りつつ輸入なる牧草の束の圧縮を解く　伊東まさ子
来るたびに将棋を挑む孫のうでほめつつ夫は勝を譲らず　篠本　久子
こだはりは日陰の雪のごと残りひとり昼餉の干鰈叩く　安東はつ子
サロンパス買ひたる若き板前の鮨の匂ひを残して帰る　小倉　法子

◇西播磨短歌祭

（十月十七日・西播磨文化会館）

●兵庫県知事賞

掬ふ手を逃れ逃れて売れ残る金魚が浅き水槽泳ぐ　山田百合枝

●県文化協会賞

風呂に焚く生木の粗朶の水噴きて青き匂ひを夕闇に撒く　石戸　泉

●西播磨文化会館長賞

電動の車椅子より会釈する少女は今日も鳥籠を抱く　佐々木妙子

●奨励賞

祖先らの御霊迎ふと焚く麻幹眼つぶればかそけき音す　赤松　年重
亡き夫が使ひ古して彫あさき印鑑今も傍に置く　太田　貞子

◇兵庫県民短歌大会

（十一月二十三日、和田山農研センター）

●但馬文化協会長賞

身構へてセールス終へし暑き夜を徐ろに貝のネックレス外す　小倉　法子

●入　選

ゴシップの目立つ車内の広告が揺れて無人の駅を通過す　森本萬千子
納屋隅の塗板に桝の数記す夫が最後の籾摺のあと　日下ふさゑ
運転席に残り香のなほある如き亡夫の愛車の牽かれてゆきぬ　大崎喜美恵
診療の順待つ患者の中にして六十年前の餓鬼大将もゐる　小倉　松子
にこやかに握手もとむる候補者に心を見せぬ手をそっと出す　安東はつ子
狭き地に割込むごとく鉄骨の組まれてビルの形なしゆく　太田　貞子
人咬みて捨てられにゆく保健所にいそいそとして犬の先ゆく　安政　嘉子
二十一世紀の森となるらむ杉山の下刈り終へて夕陽に向ふ　田中よしの

◇第六回宍粟郡民短歌会

（十一月二十九日・山崎文化会館）

●知事賞

洗ひても匂ひ残れる作業着をまとひて今日も素麺作る　安政　嘉子

●県会議員賞

ここだけの話といふを聞かされて帰る夜更けの風耳に鳴る　森本萬千子

●神戸新聞社賞

按摩機のボタンを弱に切り替へて薄きわが肩暫く揉ます　山田百合枝

●山崎町長賞

老故に無視をされたる思ひもち小さき影を踏みつつ帰る　太田　貞子

●山崎町会議長賞

夫の呆け笑へずとひとり思ひをり切手貼らざりし手紙戻り来　矢羽野たづ

●山崎町教育委員会賞

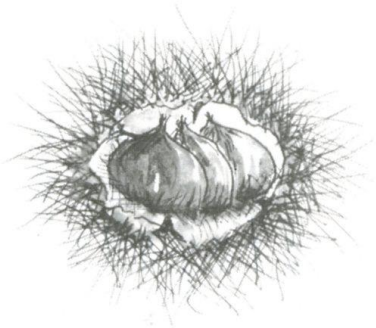
水道の水を伝ひて来る秋か昼冷たきに茶碗を洗ふ　藤原　すみ

●山崎町文化連盟賞

競りの順長く待ちゐる子牛らの背は黒黒と汗に光りぬ　伊東まさ子

●宍粟郡歌人連盟賞

炊飯器の音にふと思ふ薪くべて釜に炊ぎし飯はうまかりき　大井　秀子
あっさりと脱ぎゆく女の映されて我家の少年しばし俯く　田中　君枝
永病みて細き腕をかこちたる父憶ひつつわが老斑（もみ）を撫づ　森下　淑子
足萎えを詠むは哀しと逃るごと歌を忘れて生きて居たりき　瀧元　善子



青嶺句会四十周年の回顧と集い

山崎町俳句協会
和田疎人

私ども青嶺句会は昨年九月に創立四十周年を迎えた。四十年もの間、「倦まず弛まず」という言葉は平凡だが、消長はありつつ今日まで続いて来たことは慶祝すべき事だと、幹部の間で結論に達したので、去る十一月十五日「青嶺句会四十周年の集い」を山崎町元山崎のチビッコ会館で開催した。

私ども句会の名称は初め「秋嶺句会」と名づけて出発したが、昭和二十四年九月に「青嶺」という月刊誌を刊行するに当たって、会名も「青嶺」と改称する事とした。

私どもの結社は、正岡子規―高浜虚子―五十嵐播水の流れを汲む伝統俳句のホトトギス系で現在に至っている。

そのせいか、当地に来遊された俳人はみなホトトギス派ばかりで、まず五十嵐播水、中村汀女、田村木国、西山小鼓子、中村若沙、吉川葵山の諸先生であり、現在も会員の中では播水師の「九年母」に據ってこの道に研鑽、精進されている人が多い。

昭和二十四年には謄写刷りで薄っぺらなものながら月刊誌青嶺を刊行する事が出来た。然し三年足らずで発行休止、廃刊の理由は、編集に情熱を傾注してくれた編集長とも言うべき中野秋藻氏が神戸に転出されたためであった。

それでもその期間中に一番多い時は三百部近い部数が投稿者や読者の許に届いていた。

機関誌は廃刊したが、爾来四十周年の今日まで月一回の例会はかかさず続け、年に一、二回の各地への俳句の吟行は必ず多数の会員の参加を得て行っている。

現在、句会は漸次新会員の参加を得て盛大になりつつある。

四十周年を機として、本年十一月に、「青嶺句会四十周年の集い」を開催して現会員は勿論、創刊当時の投稿者、愛読者にも出席を要請した。

現会員は殆ど出席されたが、遠くは姫路の築谷暁邨国手、南光町の梶本夜星俳協会長、一宮町の杉本和水、安富町の田中恵、山崎の原田耕南、長川秋耕の諸氏の臨席を得た事は主催者としては大きな感激であり欣びであった。

四十周年記念句会の応募句は一〇〇句程集った中から八名の選者によって特選、入選句を次の通り選出した。

特　選

夜も昼も燃え曼珠沙華燃え尽ず　山田　東軒

子相撲の負けても褒美村祭　杉本　和水

聞き捨てにならぬ話にマスクとる　福田　泊水

夜寒の灯妻の遺影に見つめらる　築谷　暁邨

夜寒さに早閉づ木曾の土産店　杉本　いし

入　選

嘘も言ふ看護婦やさし秋桜　高野　南嶺

母の忌に蕾なれども山茶花を　永井とみ代

臨終の叔母へこの世の虫が鳴く　芦田　八重

劇場(こや)はねて夜寒ピエロの影法師　原田小次郎

鵙の声背に響きて定年期　井内　寂雨

さりげなき事が気がかり夜の寒き　杉本百合子

縁を拭き山茶花を掃き所化二人　原田　耕南

山茶花の散り敷く庭を柩出づ　下村　君子

夜寒の灯とどくところに招き猫　村元　優子

救急車ぴたりと止り夜の寒き　大谷　延子

特選、入選者への賞品授与が終って少憩の後、懇談会に移り山田東軒君の名司会振りで、おのおの一盞を交し合い乍ら青嶺草創期の追憶談、会員同志の名句の褒詞の交歓等、一座は華やかな雰囲気が満ち溢れ、司会者の次つぎへの指名によるのど自慢が展開した。八重、光栄両君の詩吟をはじめ男性群の泊水、春雄両君はじめ諸君の歌謡曲、短歌の朗詠、祝辞等が続出して刻を忘れる程の愉しさを満喫した。

最後に小次郎君の閉会の辞を聞きお互斯の道に真摯な精励と、渝らない熱情を傾注する事を誓いつつ暮れ早い晩秋の暮色が迫らぬ内にと散会した。

牛窓港・夢二生家吟行抄

山崎俳句協会（青嶺部会）

木々芽吹く既に己の色もちて　芦田八重
つつじ咲く兵庫岡山境なく　〃
春惜しむ夢二の小さき古机　福田泊水
瀬戸の海凪ぎ躑躅山みな低し　〃
春光に透き大正のすり硝子　原田小次郎
大正の文机に倚り春惜む　〃
遠霞島を浮べて瀬戸凪げる　春名愛子
夢二の碑佇つ庭ひそと春深し　〃
幽明の境なきごと沖霞む　藤家千代
恋多き人の生家に春惜む　〃
行く春を夢二の里に惜みけり　石野光栄
麗かや漁船浮べて漕ぎ出でず　〃
日生路の磯屋しずかに干鰈　杉本いし
夢二生家現（うつつ）に殘り余花の冷　〃
子に辞書を借りて吟行風光る　永井とみ代
柳ゆれ夢二の世界夢二の画　〃
鯉のぼり休めば風も休む時　高野薫風
木蓮のみな上向いて咲く日永　〃
婚の荷を運ぶトラック花菜道　原田馳雲
菜の花のまばらに咲きて休耕地　〃
春暁に目覚めて心句の旅に　下村君子
沖はるか水尾一すじに春の海　〃
河川敷ちびっ子野球春うらら　大谷延子
たんぽぽを踏まず通りぬ畦の道　〃
湾うらら幾何模様なす牡蠣筏　和田疎人
落花浮べ水上ゴルフすたれたる　〃

（牛窓港オリーブの里にて）

最上山より八幡神社吟行抄

山崎俳句協会（山脈部会）

花の下句帳に得たるもの貧し　高野しづ
丹の鳥居遠く立ち在す花の上　〃
一病の枷（かせ）を背に負ひ花に酔う　小紫いく
椿落つ炎ゆる命の重たくて　〃
窯場跡ただ碑のみやたんぽぽ黄小畑柏人
老一人遅日の畑に竹結える　〃
童心へ素直に還る花の径　秋久光子
鬱蒼と繁る神木風光る　〃
人避けて句帖をひらく花の蔭　本條栄女
胸像の園長笑ます花の下　〃
走り根の荒々しさやすみれ草　高野薫風
鶯の声町騒にまぎれなし　〃
新しき墨の卒塔婆も花の墓地　田中　恵
初恋の思い出花の山に来て　〃
鶯の声を聞きつつしずごころ　山野源子
白雲の如き桜を遠くより　〃
老杉の芽ぐみ写して池寂か　尾崎鈴子
花曇り願いは千々に神の鈴　〃
麗かや句碑に木洩れ日影落し　伊藤紫霞
鶯の声はずませて春うらら　〃
黄水仙喇叭の如き花掲げ　横井雪子
春愁や悲しき別離消えやらず　〃
たまに人佇てる遅日の忠魂碑　宗平素栄
弁天の池春山の影映し　〃

（62・4・8　元山崎チビッコ会館にて）

山崎俳句協会雑詠

「青嶺集」

蠅取紙まだ生きている蠅鳴けり芦田八重
虫干や母在りし日の蔵草履　秋久光子
大ぶりにブランコ漕ぎて星月夜石野光栄
老眼鏡買い替え灯下親しめり　大谷延子
亡き人の想ひはつきず夏帽子　高野南嶺
空蟬を孫は大事に掌にのせて　沢田ちゑ子
山鳩の声のみ静か木下闇　高野薫風
露けしや光を知らぬ水子仏　下村君子
河鹿鳴く女ばかりの露天風呂　杉本いし
露の身に癌病棟の長い夜　菅原郁代
麦笛に疎開の君の俤を　田中良子
花菖蒲ひらくを待たず亡夫に剪る　友沢恭子
防人の歌碑の岬の星月夜　中野秋藻
おのおのに個性あるごと光る露中瀬公三
身ほとりに師の句集置き梅雨に病む　永井とみ代
円本の時代ありしと書を曝す　原田魚梯
看とられていても師走といふ心原田小次郎
秋燈を消して思索の闇に居り　原田駆雲
露草の群落の瑠璃あざやかに　秦　千里
能面の輝き妖し秋燈下　春名愛子
大庄家たりし藁屋根柿若葉　福田泊水
爽やかな英語受話機を流れ来る藤家千代
蚋打ちつつ畦の草刈はかどらず深川春雄
駐車場の車が眠る星月夜　前野千恵子
墓守の憩う椅子あり木下闇　村元優子
家元の至芸に酔いて秋燈下　山中恒女
わだつみの碑文も暗き木下闇　山田東軒
星月夜デッキチェアは満席に　和田疎人

「山脈集」

厨窓開くれば涼し路地の風　伊藤紫霞
靄に浮く影の数増す蜆舟　尾崎鈴子
政宗の独眠光る菊人形　大友一虎
亡母の忌やひとり夕餉の焼なすび　大上みよ子
美術館夏の帽子の似合う人　木村一子
風鈴は淋しき時は淋しき音　久保いとゑ
炎昼の運河に鉄の灼く匂い　高野しづ
ビヤガーデン一テーブルは女客高野薫風
弥陀涼し紅唇冥（よみ）の母に似て　小紫いく
古墳への径狭まりて花芒　小畑ぬい
廃校となる校庭を雹つぶて　田中　恵
法話終り御堂出づれば流れ星　牲川信子
子等の来ぬ父の日わびしビール抜く　野村静山
芋頭掘り並べたり秋日和　姫野マサ子
菖蒲園花摘み女居り花の中　本條栄女
天文台に観し時のごと流れ星　前田　京
一望の菜の花畑月おぼろ　宗平素栄
一瞬の光芒引きて星流る　山野源子
寒燈や客一人なる山の駅　吉岡　巌
燈台の灯のみの闇に星飛べり　和田疎人

茶道に想う

茶道研修会　前田宗好

若し誰からか「茶道の心を最も端的に言葉で表現しなさい」と言われれば、それは、和敬清寂と申すでしょう。これは和やかな心、人を敬う心、清らかな心、わびさびのわかる心、だと思います。しかし言うは易くしてその心を自分の人間性として体得することのむずかしさをしみじみ感じるこの頃でございます。

先日も裏千家に入庵されて六十有余年の大先生のお話に家元に入庵された時点では「五、六年も修業すれば、との気持ちであったが、いざはいってみると、長い長いトンネルにはいったも同然で、だんだん進むにしたがって真っ暗闇、全くどうしようもない時を何十年もすごし、やっと明るみが見えだした感じで、今ではただ一生を茶道一すじの生涯をめざしての日々である」とおっしゃっていました。

私共ではとても望めない境涯だと存じますが、お家元のよくおっしゃる「道学実」即ち道義をわきまえ、人の道を違えず、あらゆることに向って学ぶ気持、それらをお点前の心入れとして実践することこそ、大切であり、又お家元の「一盌によるピースフルネスを」のお心に添えるかと思います。

ともすれば物の豊かさに馴れすぎて、心の荒みを感じるこの世相の中にあって、一盌によるうるおいと、思いやりのあるくらしを身近なところから実現したいと存じ精進致しております。

侏儒の愁い

邦楽邦舞研究会
光陽会
杵屋佐与恵

日常に追われ、忙しさにあえいでいると、つい練習を怠ってしまっている自分に気づく。そうするとむしょうに三味線を弾きたくなり、例によって子どもを母に押しつけ、三味線を箱から取り出すことになる。

「ああ、良かった。破れていない」

三味線はたいへんデリケートである。湿度の関係であるのか、朝みた時はどうも無かったのに、夕方みると破れていたということがある。

薄くうすく張った猫の皮、細い三本の絹の糸に象牙の撥がふれる。と、練習不足は如実にあらわれる。指が思うように動かない。音がはずれる。（これを俗にどつぼにはまる、という。）

どうすれば満足のいく音色を出せるのだろう。深く、うっとりとするような響き…、祖母であり師でもある杵屋佐与鶴のように柔らかで上品な音色を…。

自己反省で落ち込みながらも弾き続ける。自分の音色をさがし続ける。しばらくすると三味線が鳴ってくれていることに気がつく。

「あ、ごぶさたしていたのを、許してくれたかな」

それでは、と静かに唄いはじめる。三味線の音につられないように、粋に皮肉に、または勇ましく、あるいは艶めいて…。

どう表現すれば良いのだろう。考えながら、弾き唄う。こうやって何度も何度も稽古を重ねることによって技術が得られ、それは自信に結びつき、そしてさらなる飛躍へとつながるのだと思う。

以前、山崎は芸能が華やかであったときくにつれ、同世代の同好者が身近にほとんどいない現状が重くのしかかってくる。若い男女は今たいてい職場を持ち、そして何処ともその情勢は厳しい。ゆとりの少ない世の中で、それでもほんの少しのきっかけで興味を示してくれる者がいるのではないか。

文化会館が完成した今、例えば何々教室というようなものを、町教育委員会のバックアップのもとに開けないものか。町民が気軽に邦楽に参加できる場があれば…。

金銭うんぬんではなく、同好者を得たいのだ、と切に思う。

すばらしい才能を持たれた方々が引退されてゆくのを見るにつれ、次代をになってゆくには余りにも心細い現状に胸が痛む。

観世流宗家をお迎えして

秀峰会　春名義教

能楽会の開催は年を追って増加し、都会の能楽堂は休む暇もない活況を呈しています。近年は度々外国へも紹介され、能に関心をもつ外国人も増えてきていると聞きます。こうして能が我が国の古典芸術として国際的な評価を受けつつあるということは喜ばしい限りであります。数年前よりわが宍粟郡においても、郡内の謡曲同学の方々が相集い謡曲同好会をつくり、年々大きな成果を上げ各方面の注目を集めるようになってきています。

去る九月二十六日、第五回をむかえた山崎八幡神社薪能は、好天に恵まれ、新装成った能舞台に多数の聴衆をお迎えして荘厳に奉納されたのであります。

特筆すべきは、この日観世流二五世宗家、観世宏正師がご子息観世清和師と共に来演され、神歌「翁」を奉納されたことであります。

「翁」という曲は式三番ともよばれ、能成立以前、平安時代よりあったと推定されているもので、能というよりむしろ一種の祝禱の歌舞で、能を始める式典、祭儀であるといわれています。古来演者は別火し斎戒沐浴して勤めるのが定めであると言います。したがって出演者は全員最上の礼装で登場します。「能にして能にあらず」といわれるように、「翁」は神事であり天下太平、国土安穏を祈って舞われるこの神曲こそ奉納に最もふさわしい曲と申せましょう。まことに得難きときに遇いがたき至芸をまのあたりに拝しひとしお感銘ぶかいものがありました。伝え聞き郡内ばかりではなく遠く阪神、姫路方面からおいで下さった方々にもご満足いただけたことでしょう。元禄時代創建と伝えられる能舞台、このたび完成したばかりの橋懸かりなどもご覧いただき、山崎の文化についても認識を新たにして戴けたことと、山崎人として肩身の広い思いがしたのは筆者のみではありますまい。

このことは当地謡曲史上の白眉として後世永く語り伝えられることでありましょう。「宗家をお迎えする」という夢のような至難事が計画されて以来、二年間にわたる奉賛会のみなさまと福王流宗家江崎金治郎師の献身的なご奔走あればこそ今日、見事に実現をみたわけであり、八幡神社、同宮総代各位のご理解とご支援があったればこそ一切の準備が滞こおりなく行われ、能を成功させることが出来たと言っても過言ではありません。

絵の心

美術協会　藤原義弘

絵をはじめて十数年過ぎたが、いまだに初心の域から抜け出せず、キャンバス一枚毎に悪戦苦闘を続けている。そして自分はアマチュアだから気楽に描けるなどと、安易な気持ちでいたが、いろんな先輩や絵画仲間と話し合ったり、展覧会をみたりしているうちに、そんな安易な気持ちでいてはいけないのだと思うようになってきた。

そのような意味から、私も、写実をはじめ、キュビスム、フォービズム、シュールリアリズムから各種団体展に至るまで、時間の許す限り鑑賞するようつとめている。

どの展覧会をみても、プロ・アマ問わず画家達は、ありったけの力で画面に体当りしている様子がうかがわれる。

最近の展観では、姫路市立美術館で行われた鴨居玲展で、私に似合わず久し振りに感動を覚えた。自画像連作や浮遊する教会、安井賞受賞作「静止する刻」、あるいは一見ユーモラスに見えるが、人間の哀感を描いた「酔って候」など、セピア調の暗い画面から、鴨居芸術の真髄を強烈にみせつけられたような気がした。又物静かな画面から鴨居玲のほのぼのとした人間味が、私の心に伝わってくるのを覚えた。

よく「絵は心」などと言われるが鴨居絵画こそ「心の絵」であろう。それと共に、鴨居玲展は私の心の奥深くにいつまでものこることだろうと思われる。

私は、絵を描くとき「形・色・構図」などにこだわり、心の表現を忘れているように思える。そしてそこから脱却できずにいる自分が、小さく恥かしく、哀れにさえ思える。

もちろん絵である以上「形・色・構図」も大切であることは言うまでもないが、これからは「絵の心」についてもっと学び、アマチュア乍らの「心のある絵」を描けるよう心がけていきたいと思っている。

植物同好会の活動

事務局　井口武一

植物同好会は、久宗丑雄先生を会長に、県立昆虫館々長の内海功一先生の指導のもと、去る十一月二十九日、第十九回めの観察会を終わりました。内海先生には、発足以来、毎回来ていただき、植物のみならず、昆虫、野鳥まで教えていただき大変お世話になっております。

山崎門前の八幡神社をかわきりに、蔦沢の岩上神社、垣武伊和神社、物代主神社、神野の与位神社、田井の社、河東矢原の社、さては、安志の加茂神社、と、それぞれ鎮守の森を尋ね歩きました。

また、珍しい植物、昆虫を求めて、比地の滝、母栖の滝、関の鹿ヶ壺、それに、戸原の河川敷（その時、古墳も見学）、梯の山道、三土中学校の裏山峠へも観察会のメンバーは訪れました。

その他、母栖にある関電の研究所、五十波の県立林業試験場、出石の花菖蒲園の高山植物も見学しました。また山崎小学校の一室をお借りして、林業試験場の鳥越さんには、きのこの話、古池さんには、森林植生についての話をしていただきました。

観察会では、ただ、植物の名、虫の名を知るだけでなく、それにまつわるお話を聞くのが楽しみです。薬になる植物、食べられる植物、それに江戸時代、飢饉をしのいだ植物とか、いろいろな知識が深まります。また、会員相互の教えあいもあり、参加した一日は、自然にひたり体と心の洗濯をしたような気持で帰るのが常です。

また、冬、山野へ出られない時など、スライド（会員が自作したもの）や、資料を持ちよって研鑽を積むのも楽しいものです。

この会は、自分の知らないことをたずねたり、知っていることを広めたり、どこかで聞いた「知るは楽しみなり」を地で行っているような活動なのです。

最後に、この会は心易い会です。植物の名前を知りたい人、虫の話が聞きたい人、どんどん参加されては如何でしょうか。

宍粟郡は兵庫県の北海道とも言われ、山また山、植物、昆虫の宝庫です。それに、草花にまつわる民俗もたくさん埋蔵しています。

さあ、新芽の吹く早春、みんないっしょに、野や山へ、更に里へ出かけて見ようではありませんか。

無形民俗文化財の指定をうけて

宇原岩田神社
奉納獅子舞保存会　志水正信

昭和六十二年十月八日付で山崎町の無形民俗文化財として、我が宇原岩田神社奉納獅子舞が町内のトップをきって指定をうけました。

早速十月十日の秋の祭礼に際し神前に神楽を奉納し報告祭を行ない、伝統あるこの獅子舞の継承について、お誓いをいたしました。

宇原の獅子舞については今までにも紹介しておりますとおり、町内では唯一の毛獅子ですが、その起源は判然といたしていません。江戸時代末期に飾磨郡の護持村から習得したと伝えられています。

山崎藩の覚帳に若殿忠明様が肥前守に任ぜられたお祝が安政五年に八幡神社で行なわれた時、領内の安全ならびに本多家の武運長久を祈って村々の住民は種々の催物を神前に披露し、猶西御殿に赴き奥方様初めお子様方にもご覧に入れたと記載されている。その時、宇原村から獅子舞を奉納しているので、少なくともそれ以前から存続していたと考えられます。

安政五年というと、徳川幕府では十三代家定の時代で井伊直弼が大老となった年で今から一三〇年前となります。

獅子舞の内容は神楽、吉野、相之山、等一一種に亘りますが、特に岡崎や梯子獅子は花形であって、無形民俗文化財に指定の基盤になっていると思います。

当地の氏神さんである岩田神社への奉納は九年に三回の割で行なわれます。

近年町内の皆様に見てもらったのは、昭和五十七年の「第一回山崎まつり」、昭和五十六年及び六十年の「秋の芸能祭」昭和六十一年の「さつきマラソン」のイベントとして披露しています。

町外に出たのは、「西播磨芸能祭」（姫路市）、日本郷土芸能会主催「神々の祭」（長崎県）、「商工会法施行二十五周年県大会」には神戸市の県立文化体育館で出演。

昨年十一月には京都市総合見本市会館で開催された「近畿むらおこし物産展」のイベントとして県商工連の推せんで出演。「神楽」「吉野」「岡崎」の三曲を見て頂き、多大の歓声を得て面目をほどこしました。

しかしこの伝統ある獅子舞の保存には数多くの若者の参加が必要であり、幾多の問題を残しておりますが、種々検討を加え地域の方々の協力を得て継承に尽力していきたいと考えています。

ヨーロッパの旅

昭和会
平松幹司

成田空港から一九時間、やっとフランスのドゴール空港に着いた。

ターミナルに着くとオランダ航空の案内嬢が、日本の皆さま早く飛行機に乗って下さいとせかす。農林省の世話人は慣れたもの。トイレでも行ってゆっくり乗りましょう。私たちが乗らなければ出発しませんよと、のんびりしたものでした。

数時間でオランダのアムステルダムに着き、ダイヤモンド工場など水の都を見学しました。なんと日本の車が多いのに驚きました。約二〇パーセント、特にホンダシビックが多かった。

いよいよ目的であるヨーロッパの農家をたずねてバスの旅がはじまる。アムスから小便小僧、世界最大の花き市場「ヘルスメイヤー」日本、ハワイからも花が来ていた。オランダの風物、風車などをあとにして、ケルンでの休日を楽しむ事になり、古代文化の多い建築物、教会などを見物。ケルンの日曜市場、ガラクタ市、日本TBS放送のヨーロッパの朝のロケ風景などものめずらしく廻り、ベルギー国境を越え西ドイツへと車は走りました。ライン河沿に登って行く途中、かの有名なローレライからライン河を望み、昼食は明石の婦人団体と一緒になり、なつかしく、昔からの知人のように話がはずむ。数多くの古城を山頂にあおぎながら、ビルゲンドルフ村へと向かった。

ビルゲンドルフ村へ着くと嬉しかった。ドイツの国旗に並んで、日の丸の旗が歓迎してくれた。なんとなく目頭があつくなった。その日は町あげての歓迎会であった。議員、村長、日本と同じく名士を集めて、ビール・ワインで乾杯。特に村長さんの娘さんの歓迎キスはテレくさかった。

二日間の民宿体験をしてライン河とも別れをつげ、スイスに向った。アイガー北壁を眺めながら登山電車でユングフラウヨッホ三、四五四米へ登り、世界で一番高い郵便局から母親に絵はがきを出した。

日本を出発して十七日間が過ぎ、何んとなく外国人らしさが身についてきて、気分的にも余裕ができたところで最終のフランスへ着いた。モンマルトル、シャンゼリゼ通りなどはアメリカ・日本の観光客で混雑しており、さすが観光の都パリでした。

目的であったヨーロッパの農業は耕地面積五十町と広さはあるが、貴方の娘さんは農家へ嫁にやりますかと質問するとノーの返事がありますが、EC諸国では農業振興の重大さを認識し、諸政策がなされていることを痛感し帰国しました。

私の生きがい

播磨さつき会
谷口二郎

私が、さつき作りを始めたのは三十五年程前のことです。美しいさつきの花を見て、私も作ってみたいと思いました。幸い樽岡先生の勧めもあって、私は、さし芽から教えていただきました。

さつき苗を貰って作り始め、二十年、三十年と経つうちに鉢数も多くなりました。

盆栽作りは根気が大切です。大自然に耐え何百年もの年月を経た大木、土にしっかりとおろした根張りと立ち上がり幹、そして、枝くばりを想像しながら盆栽を見て育てる事は、難しい事ですがさつき作りは楽しいものです。

五月になると「つぼみ」がふくらみ、昨年まで出なかった花芽が出た時の嬉しさはなんともいえないものです。また、本を見てここに枝がほしいと思う所に新芽を見つけたその瞬間、なんともいえない嬉しさがこみあげてきます。

秋も深まり山の紅葉が美しいころには、八咫の鏡も紅葉してきます。このように四季の移り変わりとともに変化をみせる「さつき」を眺めていると満足する喜びを体一杯に感じるのです。また、さつきがこうした喜びを正直に与えてくれるのです。

私も年をとり老人会の一員となりましたが、さつきを育て、朝晩眺めることの楽しみ、そしてもう一つは、老人の「ゲートボール」で汗を流すことが私の「生きがい」です。

自分の趣味を好きなように思いきり楽しむことができる。これが私の「長生きができる秘訣」であると思っています。

山崎町の皆さま、さつきを愛し育てて楽しんでください。

さつきの町、山崎町発展のため、これからもさつき作りに努力していきたく思います。

プロの将棋

山崎将棋同好会
本條　衛

日曜日に、NHKのテレビ将棋を楽しまれている方も多いと思います。私もその一人です。

そのブラウン管の中の出演者や、対局者から、教えられる事が多くあります。

第一は、品格のある雰囲気と、礼儀正しいプロ棋士の挙措動作についてであります。

出場者も、最近は、十代を含む若手棋士が多くなりましたが、端座して対局する謙虚な姿勢は見事なものです。奨励会時代からの躾や、長年の自己管理が、習い性となって身につき、緊張感のただよう中にも、しっとりと落ち着きのあるムードを醸し出しています。

対局中は、危急泰然、好機決然、対局後も、得意冷然、失意平然の趣で、卒直に、仔細に、局面を検討する姿は、流石に天下一流の棋士と、感服します。

第二は、持時間の使用法であります。僅かな持時間ですから、序盤、中盤、終盤に対する時間の配分が肝要です。

日頃の研鑽錬磨の蓄積が、この時間の使い方と、次なる一手に凝縮して、一挙に噴出する様に感じます。プロは対局すれば必ず体重が減るといわれますが、我我の想像を絶するエネルギーを消耗し乍ら、有限の時間と闘っているのでしょう。

第三は、読みに読む大局観であります。プロですから、当然の事とはいえ、変化に対応する駒の、慎重な連繋づくり、遊び駒、放れ駒の活用、一手々々最善手を求めての決断、その応酬と忍耐、怒濤の寄せと重厚な守備、大駒も犠牲にするタイミング、肉を切らせて骨を斬る熟慮断行、最短距離を読む直感力、その背後に一貫した大局観が存在します。

一局々々が人生のドラマを感じさせ、日常生活の反省教材となります。

尚、将棋に関する格言は数多くありますが、有名棋士の好む言葉の一部を紹介しましょう。

故木村十四世名人「愈々究愈々遠」、大山永世名人「一歩千金」、升田元名人「着眼大局着手小局」、中原名人「創意工夫」、内藤九段「難局親友敗局厳師」等々。

すべて各氏の、激しい勝負体験の結晶であることに想いを致せば、洵に味わい深く、一語一句に千鈞の重みがあります。

これらの箴言は、企業経営の指針としても、相応しいものばかりです。

将棋こそは、人生の教師であります。

「一」

山崎茶華道協会
谷川善勝

ある禅語一行物の書籍をひもといて今更の如く禅語文句の無限の重み深さを感じ、思いつくまま筆を執ります。

茶室と一行物、謂うまでもなく創成期の茶の世界で活躍した茶人が大徳寺、南宗寺の禅僧と接し、或は参禅して交流を深め、茶と禅が密接に結ばれ茶の湯の次元も茶道に昇華して行く過程において、禅僧による一行物（特に大徳寺派）が尊重され、特に江戸時代以降は茶掛の主流になってきたのですが、一行物の文句の真義を会得することはまことに至難であります。然しながら、せめて文句の意味を知識として解する求道的姿勢はもちたいと思います。

さて文化の殿堂山崎文化会館がオープンしましたことは、山崎町文化連盟参加の一協会会員として同慶に存じます。オープン行事としての茶室披露茶会。チャリティ茶会等当協会の役員会員一つになって奉仕されました。来場の皆様は新しい茶席での茶味を楽しく賞味されたことと思います。

心と心が一つに、この和があつまって始めて事は成るのです。

「一」これを禅語で求めると「一」は数の「一」ではなく「唯一絶対」であり「万法一に帰す」ともいわれています。又「道、一を生じ、一、二を生じ、二、三を生じ、三、万物を生ず」であり、この理に基づいて道を歩むことが肝要です。「人一を得て以て真の人なり」ではないかとも思います。

高野圭介と囲碁の世界

山崎囲碁同好会
下谷　厚

―囲碁は一人一人のものと同時に皆なのものなのです―

「囲碁に親しむ」なんとすばらしいことであろうか。碁を打つ人、見る人、評する人、さまざまな人が混淆して盤のあるところ「橘中の楽」が出現する。碁のなにものがこれ程あやしいまでに人の魂を魅了し尽すのだろうか。たしかにわがふる里には碁に魅入られた人達に満ち満ちていたのかとさえ思われるほど碁と共に歩んだ歴史の数々が点在している。

古来、囲碁とともに生き、囲碁とともに天命を全うしたと自他ともに許す人のいかに多いかを知る。旧山崎の三木作十郎、三木元三郎、福原謙七、前野次郎吉、円山豊、梶原徳太郎、前野貫一郎、三宅金司、安井金三郎、正木芳隆、長尾直一、本條俊一、大井万兵衛、前野四郎、城下の松井与市、森下伊右ェ門、戸原の塚本牧太郎、竹添勉、竹添行雄、神野の島津美代治、蔦沢の豊住昇治、菅野の藤多渡、土万の尾崎鳩、岸原徳四郎、阪本敏雄、安富町の今念寺、下村幸太、吉田安治、山本順治、波賀町の菅谷恒太郎、鶴田秀吉、植田浜治、小林和夫、一宮町の小畑虎之助、小畑耕二、大塚敞一郎、志水一郎平、安積孝平、千種町の春名門次郎、竹内百太郎、前野善十郎、内海年明、春名卓次郎と枚挙にいとまがない。

囲碁は精神文化であるとともに、まさしく伝統文化である。わが山崎の里に伝来してから四百年の時代を脈々といきづき、幾多の先達の手によって囲碁風土が培われ、そうした土壌の中に若き棋才、高野圭介が輩出された。氏の百練に磨かれた囲碁によって輝かしい足跡を残すに至り、今日この地の囲碁界の隆盛を見ることができる。因みに氏の棋歴をたどれば、兵庫県アマ十傑戦第五位、神戸新聞西播名人、朝日十傑戦西播第一位、玄遊会最強リーグ戦第一位等数知れない。

氏の昨今は、楽しむ囲碁もさることながら、寧ろ囲碁の普及に、特に青少年の囲碁育成に尽力され、氏の指導で片山愛弘、吉岡章雄が全国青年大会囲碁の部で優勝。また、全国高校兵庫県大会優勝者高野雅永、高野雅晴を育てたことは特筆に価する。今も、大塚英一初段ほか多数の囲碁少年が育くまれている。

南和昭著「教育としての囲碁」に、氏のプロフィールが紹介されている。

―西はりま囲碁協会会長、緑の回廊囲碁協会会長、玄遊会副会長、全国少年少女囲碁育成会代表幹事、播磨少年少女囲碁育成会会長、日中アマ囲碁友好会理事、少年少女の囲碁普及や国際囲碁交流などの活動に熱意をもつ―

十一月三日文化の日、山崎町文化功労賞が高野圭介氏に贈られた。「永年にわたり囲碁の普及振興に尽され、子供囲碁教室を開設するなど青少年の健全育成に貢献」の故とある。この受賞は、得てして囲碁は単なる遊びと受けとられ勝ちなのを、公の場で高らかに囲碁文化のジャンルとしてのお墨付を載いたわけで、囲碁を愛好する者にとっては、その意義は大きなものがある。

この機に関西棋院橋本昌二九段よりアマの最高峰七段を免許せられたこともむべなるかなと思う。

高野圭介の囲碁の世界はますますその深さと広がりをもち、囲碁を通じての児童教育、囲碁による老人福祉の実践、婦人層への社会教育の浸透など、着実な歩みの中に一層八面六臂の活躍を期待するものである。

恒例の「山崎町菊花囲碁大会」で文化功労賞受賞記念対局を披露し結びとする。

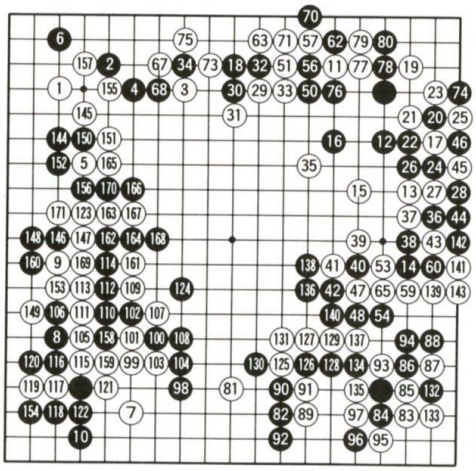
山崎町文化功労賞受賞記念対局

於：山崎町老人福祉センター
菊花囲碁大会

指導碁

昭和62年11月23日

○橋本昌二九段　●三子　高野圭介七段



(49) コウトル
(52) コウトル
(55) コウトル
(58) コウトル
(61) コウトル
(64) コウトル
(66) コウトル
(69) コウトル
(72) コウトル

171手完　白中押勝

山崎郷土研究会研修部について

山崎郷土研究会　志水美好

山崎郷土研究会が昭和三十三年再発足して以来、諸先輩の努力によって漸次発展して、現在会員数も七百余名に達しています。会の組織も、総務部・研修部・史跡部・資料部・会報部の五部に分かれ夫々の分野で活動しています。

研修部は講演会や研修旅行などの企画を担当しています。昨年は、上田光夫先生から「宍粟郡の古代から近世に至るまでの歴史」について詳細な説明を聞かせてもらい、本年は、島田清先生に「城下町山崎の成り立ち」について講演をして頂きました。郷土史への関心が高まっているのに、折角の講演会の出席者が少ないのが悩みの種です。それで、身近な宍粟郡内の文化財めぐりも行いましたが、バス一台の人数を集めるのに苦労する有様でした。文化連盟の他の会と共催しての講演会を考えようと、役員会でも話題にのぼっていますが、未だ実現しないでいます。

研修旅行は毎年春秋二回実施していますが、春は県外の各地を巡り、秋は県内めぐりを恒例としていました。昨年春には、生駒聖天・信貴山から竜田大社・薬師寺と奈良方面へ出かけ、秋には、県内の柏原町から篠山町の文化財を主として見学しました。本年四月には、京都の醍醐寺・随心院、宇治の平等院を訪れました。十月には会報創刊十五周年記念行事として一泊旅行をすることになり、木曽路の妻籠宿・奈良井宿を尋ね、諏訪大社・松本城まで足をのばして参りました。

長年にわたって各地を廻っているし、日帰りとなると行先がほぼ限定されてくるので、出来るだけ初めての所というと場所を選ぶのに苦労します。

名所旧蹟を尋ね、名の知れた神社仏閣に詣るのが楽しみで、会員になっている方々も大勢あるとか。郷土史に関心を持ち郷土の文化向上を図るという、固苦しい固定観念にとらわれず、大勢の方に気軽に参加してもらえる研修旅行に重点をおいていきたいと思っています。一人でも多くの会員に、訪れた各地での資料館とか各種の施設や、取組み方を直接見聞して頂くことによって、わが郷土山崎の文化施設の充実や町づくりに、少しでもプラスになればと念じています。

新潮三十五年

新潮会　菅原柾夫

新潮会は発足三十五周年を迎えたのを記念して、このほど「新潮三十五年」を発刊した。B5版、二十ページのささやかな記念誌。

冒頭に杉元清美会長の新潮会結成の経緯や活動状況、今後の会のあり方などつづった「三十五周年を迎えて」のあいさつ。続いて昭和五十八年から同六十二年まで五年間のあゆみ。和田疎人さんの俳句「菊に佇つ」と、藤村省三さんの短歌「生態」。全会員十九人の表情豊かな写真と「ひとこと」。山崎文化会館の完成を祝福、会から山崎町へ贈った二紀会理事、松井叔生画伯の「ヴェニスの夜景」と、三軌会評議員、嶋津和幸画伯の「山崎城本丸跡紙屋門」の絵画の写真など掲載。表紙は山崎美術協会、福岡久蔵会長が筆を振った「紙屋門」の絵画で飾っている。

「ひとこと」の一部を紹介すると、二代目会長、俳人の和田秀男さんは「新潮会が積極的な文化活動をしていた昭和三十八年夏、東大名誉教授、フランス文学の権威、辰野隆先生を迎えて下村記念館で開いた文化講演会。その夜の先生を囲む座談会で酒を酌み交わした懐かしい思い出」。三代目会長で国民文学同人、短歌春秋選者として活躍している歌人の藤村省三さんは「短歌のこと」。四代目会長で山崎文化連盟会長の壺阪壽さんは「五十年以上も続けている新聞記事の切り抜き保存と、その活用方法」。五代目会長で西兵庫信用金庫理事長の杉元清美さんは、「戦後三年間、ソ連に抑留され、寒さ、飢え、重労働の三重苦に悩まされた〝生き地獄〟の生活」などを語っている。

同会が記念誌を出したのは、今度の「新潮三十五年」が七回目。初回は昭和三十年の三周年誌。二回目は同三十七年の十周年誌。それからは五年ごとに発行している。このうち十周年誌、二十周年誌、三十周年誌の三回は、昭和二十七年発会以来の文化活動など会のあゆみを丹念に記録。会員のプロフィルと写真や「思い出のひとこと」。講師の社会評論家、嘉治隆一先生、神戸新聞社長、朝倉斯道先生、山崎闇斎の研究家、東大教授、阿部吉雄先生らの随想など掲載した充実したものになっている。

会員たちは今後、長い間に培われてきた友情を、さらに深めながら地域文化の向上に寄与、人生をより一層実り多いものにしたいと張り切っている。

「ベートーベン作曲 交響曲第九番」　昭和62年12月20日　於 山崎文化会館

宍粟の地で第九公演を終えて

粟の実会
尾崎正明

山崎文化会館の竣工に合わせて、宍粟郡ではじめてベートーヴェンの第九交響曲が盛大に初演されました。昨年初めより文化の殿堂が完成するにあたって、「やってみたいな」という声があがりはじめ、関係者が実行委員会を作って、準備を重ねてまいりました。六月七日の結団式以降、毎週月曜日に練習を重ねるうちに団員は二八〇名を数えることになりました。ベートーヴェンの第九公演は各地で行われていますが、宍粟五万五千人の地域でこれだけの人々が集まるということは、当地の音楽に対する関心の高さを改めて強く感ずるものです。

今回の公演の特色は、手造りの第九をやろうということで、オーケストラは大阪音楽大学の管弦楽団、ソリストは山崎出身で大阪音楽大学の講師をされている高田浩平氏をはじめ、久保田正末、塚田美紀、秋田多佳子の各氏は郡内在住者、そしてもちろん合唱団は、宍粟郡内を中心に周辺地域の人々によって構成され、地域の中に根づいたものを目指してまいりました。このことが、ベートーヴェンの第九交響曲に託した想いと重なりあうかのように熱気のこもった公演が実現したのだと思います。

この度の第九公演を契機にして、今まで町単位でやっていた音楽活動が人のつながりが出来ることによって、郡単位、あるいは、もっと広域で行える可能性が出来てきたことを非常にうれしく思います。

山崎町文化連盟役員及び団体名

会　長　壺阪　壽
副会長　和田秀男
〃　杉元清美
〃　福山清一
〃　藤井慧乗
理　事　福岡久蔵　山崎美術協会
〃　根岸元彦　山崎文学会
〃　堀口春夫　山崎郷土研究会
〃　朱山　毅　山崎茶道研修会
〃　谷川道一　山崎茶華道協会
〃　金井信治　播磨さつき会
〃　志水正信　山崎郷土芸能保存会
〃　藤村省三　山崎歌人協会
〃　伊野操治　山崎謡曲同好会
〃　秦　耕三　山崎邦楽邦舞研究会
〃　三宅宏佳　山崎将棋同好会
〃　平松幹司　昭和会
〃　杉元栄男　山崎詩舞道連盟
〃　福田栄三郎　山崎俳句協会
〃　菅原柾夫　新潮会
〃　髙野圭介　山崎囲碁同好会
〃　田中健一　山崎合唱連盟
〃　尾崎正明　粟の実会
〃　井口武一　植物同好会
監　事　三浦昭平　昭和会
〃　荒木俊介　山崎文学会
事務局長　長川耕一
事務局　杉元正輝　鳥居紀子

●やまさき文化編集委員
浅田耕三　荒木俊介　北川泰子
根岸元彦　藤村省三　藤村清一
安井道夫　和田秀男
（アイウエオ順）

▼編集後記▲

編集長　根岸元彦

本年度秋に、我々が待望久しかった、山崎文化会館が完成した。これで郷土の文化活動もそのレベルも、一段と向上するものと期待出来る。

同じく文化活動といっても、巨大な構築を誇る文化会館と、眇たる小冊子である本誌とでは、そのスケールにおいては格段の差はあるが、内容の質において、何等の格差がある訳のものではない。両両相俟って車の両輪の如く、郷土の文化向上のために、邁進したいものと念願する。

本号では林君の好短篇「越後路雪話」を得て、文芸欄を飾ることが出来た。地味な作品だが、地味は滋味に通じ、しみじみとした味わいがある。三文雑誌の浮わついた小説を見馴れていると、何だか目を洗われるような気がして、すがすがしい。こう言うと楽屋褒めのように聞こえるが、これは、この作品の原稿を読んだ或る読書人の、読後感である。

尚、私事に亘って恐縮なのだが、昨春不時の病を患い、数ヶ月の入院治療を余儀なくされ、この仕事も、誰方かに交替して貰うよう覚悟していたのだが、近頃漸く回復に向かい、読書執筆等も旧に復したので、やっと重責を果たすことが出来て、有難く思っている。病中ご親切にして頂いた会員の各位に、誌上を藉りてお礼を申し上げます。

OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器
イトーオフィスサービス株式会社
（旧社名　伊藤文具）
代表取締役　伊藤　勉
山崎町中央商店街　TEL(0790)62−0126

山崎銘菓さつき
さつき本舗
㊚御菓子司あらき
☎(0790) 62−0170

飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

飛 石 機 械(事)　飛石レンタ・リース山崎　飛石ＣＰ姫路
トビイシ住設(事)　飛石レンタ・リース竜野　飛石ＣＰ山崎

✦最新型カラー現像機導入✦
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
コエエカメラ
宍粟郡山崎町東鹿沢26-3　☎ 62-2089

山交タクシー

山　崎　神　姫　バ　ス　西　隣
電話　０７９０－６２－２１６６(代表)

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181　ＴＥＬ (0790) ６２－００５１

＊安全で快適な生活をお届けする＊

共同石油株式会社特約店

株式會社 本條商店

社長　本條　衛

本社　兵庫県宍粟郡山崎町中井96　TEL (0790)62－4321(代)

清酒 山陽盃

ふるさとのお酒　確かな品質

本醸造 しぼりたて 龍神

純米酒 きつき 一献

サンヨウハイ

山陽盃酒造　TEL (0790) 62－1010(代)

登録商標

老松

スエヒロ
オイマツ

兵庫県山崎町　老松酒造有限会社

地元にひろがる
心のふれあい ―― にしん

西兵庫信用金庫

理事長　杉元清美

☎ 62－2020(代)